

世田谷区助成事業

「多文化共生への気づきと自己啓発に向けて」

—日本人・日本社会に対する I メイト学生の意識調査を基に—

NPO 法人

アジアの新しい風

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414

TEL/FAX 03-5426-6714 <http://www.npo-asia.org>

2020 年 2 月 25 日 発行

まえがき

「多文化共生」はアジアの新しい風（以下アジ風）の設立理念です。17年前の設立当初はこの言葉に不慣れだった会員も、今ではマスメディアで連日取り上げられるキーワードとなり、いよいよアジ風の討議として取り上げる時機が来ました。

2020年2月1日（土）昭和女子大・大会議室にて、アジ風恒例の新春交流会が行われました。今年の交流会は世田谷区の助成事業として実施され、そのテーマは「多文化共生への気づきと自己啓発に向けて」。アジ風会員と世田谷区の中高生、大学生、非会員を含む、総勢127名の多様な参加者で大変盛り上がりしました。ここに報告いたします。

目次

P 1	まえがきと目次
P2~P3	アンケートのまとめ
P4~P10	パネルディスカッション 再現
P11~17	グループディスカッション 13班のファシリテーターからの報告書
P18	編集後記



総合司会のニュン・ティ・イエンさん（ハノイ貿易大学卒業）

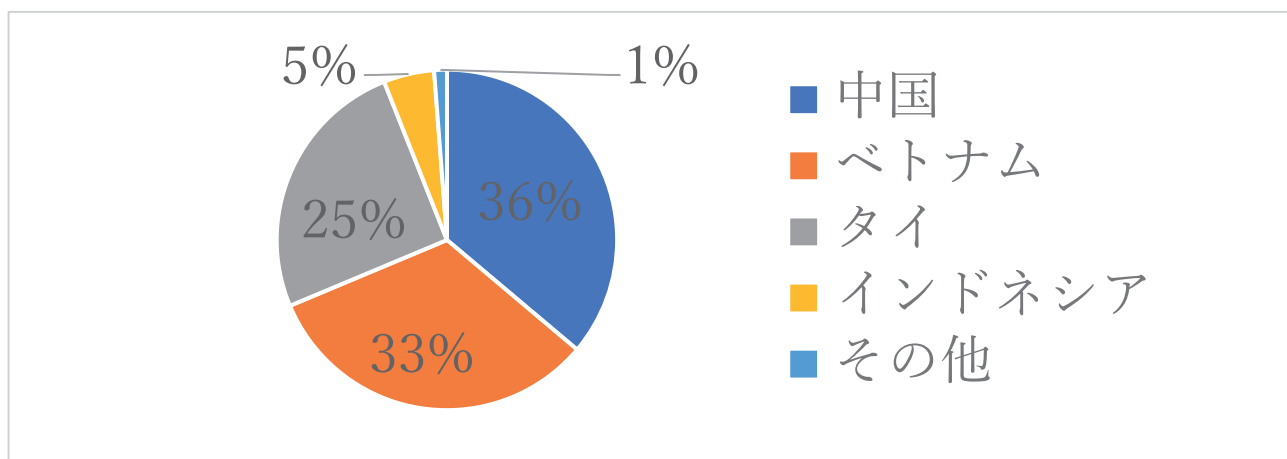


日本人、日本社会に対する外国人の意識調査

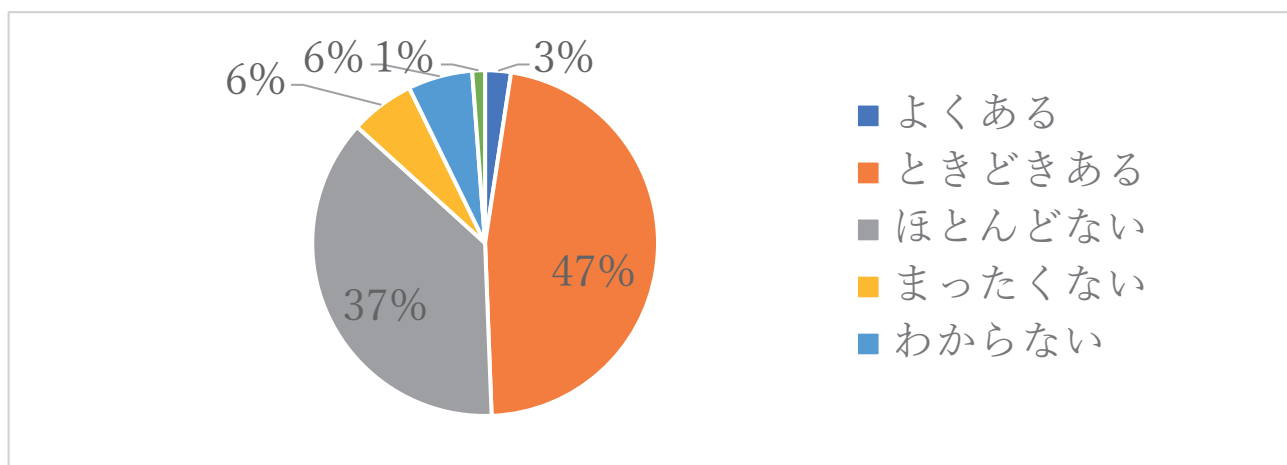
ーI メイト OB・OG たちへのアンケートからー

(I メイト留学生 59 人、元 I メイト学生で現会員 23 名、OBOG 97 名 合計 189 名に送付、回答 83 名)

1. 在留資格 留学：65% 就労：18% 永住者：6% その他：11%
2. 在留期間 1 年未満：55% 1～3 年：19% 3～5 年：9% 5～10 年：9% 10 年以上：8%
3. あなたの国籍・地域はどちらですか



4. あなた自身は普段の生活の中で、「外国人」であることを理由に日本人から偏見や差別を感じたことはありますか。又は友達、知り合いからそのようなことを見聞きしたことがありますか？



11. 日本人から偏見や差別を感じたことがある場合、直接でなくても、そういう話を耳にした場合、それはどんなことですか。自由に記述してください。

1. 自分に対してではなくて、中国や中国人に対する嫌味的な言葉が聞こえる。
2. 外国人で言っていることが分からないと思っているから一緒に話したがらない。
3. 日常生活であれば、話したら日本人ではないことと分かって、びっくりするか、顔に出る程度。職場の場合、いい機会をくれない。日本人社員優先。また、えらい女性の上司がほとんどいないので、昇進する方法がよくわからない。
4. 外国人が日本人とトラブルをしたら、警察に助けてもらえない。その外国人は有罪でないとでも日本人の方が助けられる。
5. ベトナム人ですと自己紹介したら、じゃ次の交差点の信号をちゃんと守ってねと、嫌味を言われた。
6. 言語の壁です。

7. レストランで、隣の学生たちが私の話し方を真似すること
8. 外国人に家を貸したくない大家さんがいます。
9. 日本人の同僚から相談を受けたことがあります。彼女が住んでいるマンションで外国人のマナー(ゴミ捨てや駐輪など)が悪いという。きっとその外国人住民のマナーが悪いのが事実でしょうけれど、彼女の目には、外国人という偏見が見えました。
10. 知らない人に「君の国に帰れ」と言われた。
11. 駅で中国語で友達と話したら、訳もなく日本人にぶつかったことがある。
12. アルバイト先では同じ仕事をやっても日本人と外国人の時給は違うそうです。
13. 外国語をしゃべるだけで違う目線で見られる事があります。日本人の場合、知らない外国人に対して抵抗感があったかなと思いました。オーストラリアで住んだ事がありましたが、そんな事はなかったです。
14. 日本に来たとたん、タクシーで学生寮に行ったとき、運転手さんに香港の問題について聞かれました。学生寮の中で、新聞が毎日届いています。香港問題について、やっぱり中国政府と主張の反対面になりやすいと思います。しかし、私が香港の隣にある深圳に住んで、香港出身の知人も何人もいますけど。みんな暴力行動とか、宣伝とか参加しませんでした。特に日常生活に影響を及ぼすとは言えません。中国人でも詳しく知らない政治問題について、日本の方はこの事件によって、中国政府は封建的だという判断が簡単に出しています。政治学科を専攻として勉強している私は本当に困っています。
15. 自分が料理教室に通っていたとき、外国人なので、授業料は分割払いできず、一括払いしなければなりませんでした。日本人の方は分割払いできていました。
16. バイト先で、一緒に働いていた人（おばさん・おじさんが多い）から厳しいことをいわれたこと。
17. 家を契約するときに外国人を原因に保証会社と契約できず、それに沿って希望する家を借りられない。
19. コスメ店に入って、日本人っぽくない私を見た瞬間顔を向けようとしな。聞きたいことがあるので日本語で聞いたが質問を聞かず中国人のスタッフを呼んだ。結局中国人スタッフと日本語で話していた。
18. 東南アジアの人だから低く評価されることです。
19. あるポーランド人の友達は学校のクラブに参加したかったが、「それはちょっと．．．」という答えをもらいました。多分そのクラブの人は外国人で言語問題になるか、悩んでいたようです。でも、最初、そのポーランド人の女の子は「ちょっと」がどういう意味か分からなかったのです。「ちょっと」は「NO」という意味であることが分かってから、日本人の「ちょっと」という答えが怖がっています。私自身は留学先のクラブに参加しましたが、日本語の能力はまだ上手ではないし、それに、その学校の学生はベトナム人があまり好きじゃなさそうで、なかなか友達ができません。
20. 私は外国人であることがよく忘れられるから、日本人の友人は逆に中国に対する偏見を、お世辞や気配り抜きで素直に表わしてくれます。空気が汚い、教養が悪いとかは、事実だし、ストレートに教えてくれること自体ありがたいので別に傷つくこととか一切ないです。が、やはり、日本人も中国人もどの国の人も、人間って自分の文化や習慣が正しいと思うのが人間の自己中心性からの当然のことで、異なる文化や習慣に出会ったら先ずありえないとかノンセンスだとかと判断してしまいます。なのでそこは別に差別されても理解出来ます。そのためにも日本社会にかなり深く入り込んでいる外国人として、信頼出来る中国人だとか、良い中国人もいるのだと、思われるように意識しながら頑張っています。

パネルディスカッション

「日本社会におけるグローバル化と多様性の受容」

モデレーター：シム・チュン・キャット（昭和女子大学准教授）

パネリスト：チャン・トゥ・チャン（ベトナム）、 仲村クスマー（タイ）、
ジャンミャオ（中国）、 堀 良行（阪和興業人事部）

（敬称略）

<自己紹介>

シム：シム・チュン・キャットです。出身はシンガポールです。高校を卒業して日本留学し、ずっと日本にいて、四半世紀経ちました。私の専門は教育社会学で、昭和女子大学で教えています。

私の国ではシンガポール国籍を持っている人は6割、1割の人が永住権を持っていて、残りの3割がいろんな国から来ている人です。国では、グローバルという言葉が要らないくらい当たり前のことです。日本へ来て、どこへ行っても日本人、どこへ行っても日本語でみんな同じだと言うことにびっくりしました。近年留学生が増えたとはいえ、ほとんどがアジア系の人たちです。日本も徐々に変わりつつありますが、外国人との共生に関してはいろんな課題を抱えているようです。留学生と言っても滞在期間、性別、国籍、身分によって千差万別で、受ける対応や接する日本人によって変わってきます。今日は多文化共生、グローバル化、多様性とはなにかということについて話し合いたいとおもいます。

最近はグローバル化とともに、もう一つ言われていること、SDGsといって17の持続可能な開発目標が掲げられていますが、その中には男女平等、差別をなくすことなどが掲げられています。今日は滞在期間が短い人から長い人まで、またグローバル企業の阪和興業の堀さんにも来ていただき、具体例も交えながら話していただきましょう。まずは自己紹介からおねがいします。

チャン：ベトナム出身のチャン・トゥ・チャンです。2011年に日本に来て大学に入学、2016年に大学を卒業し、日本企業に就職して社会人4年目です。9年日本に住んでいて、いやだなと思ったこともありましたが、全体に楽しいことが多かったですね。今日はいろんな意見を聞き、私の経験を話させていただきます。

仲村：去年仲村クスマーになりました。2007年中学生の時、初めて来日。1年間広島で交換留学しました。そのときは全く日本語がわからなかったのですが、楽しく過ごしました。日本は季節感があるし、タイは暑い国で、ちょっとルーズなところがあるのですが、日本の学生は厳しく真面目に勉強していました。タイにはない風景で好きになりました。その後、日本語を勉強して広島の友達と話したいと思って独学で勉強を始めました。それで大学でも日本語専攻することになり、その間何回か日本に来ていましたが、卒業してアジ風の奨学金をいただき、琉球大学大学院に留学しました。今は卒業して就活中です。





ジャンミャオ：中国から来て4年目です。東京大学の博士課程3年目です。半導体について研究しています。2015年から1年日本に留学して帰国しました。1年間とても楽しかったので、また戻りたいと思い、中国で修士課程を卒業したあと、東京大学の博士課程に入学しました。初めて来たときは日本語の勉強をしてませんでした。私は友達と話すだけで、日本語の授業を受けたことがありません。皆さんも外国語を勉強するときは、話すことが一番重要なことだとおもいます。

堀良行：阪和興業株式会社人事部で採用と研修の責任者です。当社は2兆円規模の売り上げの商社で、全世界60箇所の拠点があり、毎年4、5名採用しています。今年は本日司会のイエンさんにも入社していただきました。今年はベトナム2人、中国1人、今まで中国の方が多かった。2000人規模で30名強ぐらいの外国籍の社員がいます。世界では連結で6000人ほどの社員がいます。ダイバシティとグローバル人材の育成を目指しています。私自身は2年前に人事に来ましたが、その前は水産事業部に23年間おりましたので、東南アジアには何度も出張してきました。アメリカにも5年半駐在しています。私は企業でどのような人材が必要か、どんな人材を育てていくかという観点からお話をさせていただきます。

<日本のイメージは？差別や偏見は？>

シム：チャンさん来日前と来日後でイメージが変わったことはありますか。

チャン：19歳の時来日した。ベトナムにいたときは日本のことがよく知らなかったのので、日本の情報はドラマぐらいからです。日本人は真面目に努力して、成果を求めていると勝手に思っていました。日本人は遊んだり楽しいことをやっているというイメージはほとんどありませんでした。実際日本に来てみると、学生は勉強もよくしていましたが、遊びも全力で遊んでいて、時々馬鹿みたいなこともやっていましたので、そのとき、これが日本人なんだ、と印象が変わりましたね。

シム：そのとき、違和感、差別あるいは区別と言うことがありましたか。

チャン：私はあまりなかったですね。ただ、ベトナム出身という紹介をすると、はじめは驚いていました。見た目から、中国人ですかと聞かれたことが多かったですね。

シム：いまは見た目は日本人と変わりませんね（笑） さて、不動産関係の話になりますが、今でも、「外国人不可」とか「外国人要相談」などと書かれていてびっくりするのですが、チャンさんは部屋を借りる時に苦労したことはありませんでしたか。

チャン：私は日本で2回引っ越ししましたが、1回目は留学生で京都に行った時、2回目は就職で京都から東京に来たときですが、幸いに会社で契約してくれたので、問題はありませんでした。

シム：それはラッキーでしたね。次に仲村さんに聞きたいです。

仲村さんが今のパートナーと出会ったきっかけや、沖縄で経験した違和感、差別などをお聞きたいですね。

仲村：夫と会ったのは大学院のゼミでした。大学院ですから、だいたい40代以降の人が多く、同じ年代の人は彼しかいなかったのです。彼とはよく遊んだりしているうちに仲良くなりました。社会学専攻したので、国籍などはあまりこだわっていませんでした。彼は南の人でタイ人と似て、

緩い感じの人でしたので気が合い、結婚に至りました。

日本に来る前には日本についての知識があまりありませんでした。タイで子供の頃からクレヨンしんちゃんやドラえもんを見ていましたが、これが日本のアニメだと知りませんでした。日本にきて、ドラえもんが日本のアニメだということを初めて知りました。そこで初めて、自分は子供の頃から日本の生活や文化に接していたんだと気がつきました。それに気がついて、日本は面白い国だなと思い、帰国後、また日本へ来たいと思うようになりました。

次に日本へ来たときは日本語もわかるようになっていたのですが、来日して2、3年ぐらい経ったとき、日本が嫌いになったこともあります。大学で弓道部に入ったのですが、みんな遠慮しているのか配慮してくれているのか、疎外感を感じました。私は日本語もわかるのに、なぜ壁を作っているのかと思いました。アルバイト先でも同じ思いをしました。

今は職場では自然に受け入れてもらっています。当時のことを思うと、皆さん若いし、外国人と出会う機会も少ないし、日本人の中に突然外国人が入ってきて、心の準備ができていなかったかも知れません。いまは職場で認められているのは、英語ができる人材を募集していて、それで採用されたので、自分を受け入れてくれているから居心地がいいです。



シム：その日本人大学生はどう外国人と接していいかわからなかったから、遠慮していたかもしれないですね。

仲村：そうかも知れませんが、みんな若いですし、弓道は日本独自の文化に外国人が入ってきて、わかるのかなという感覚があったのかも知れません。私はその文化を知りたいと思ったのですが。

シム：文化に国境はないはずですがね。そのあたりをパートナーの仲村さんが日本人のイメージを変えてくれましたか。

仲村：彼と彼の家族はあまりそのような違和感がないのです。

ちょっと質問から外れますが、結婚して仲村と言う名前を名乗ると、言葉が外国人なので、日本人にちょっと驚かれます。（日本人と）結婚しているという、「なるほど、日本人じゃないのですね」といわれます。

シム：そのときどんな気持ちですか。

仲村：私も大人になって、その人がそのような発言をするのは、その人の考えだと思うようになりました。日本人全員がそのような考えではありませんから。

シム：なるほど、大人になったのですね。ではジャンさんにお聞きしましょう。

ジャン：私は中国にいるとき、日本料理が大好きだったので、日本のイメージは食べ物がおいしい、ということでした。そして日本に行って本格的な日本料理が食べたいという理由で、大学院留学のプログラムに参加しました。日本人のイメージは真面目な人ばかりで、自分とは考え方が違うのではないかとちょっと心配していましたが、研究室に入ってみると先生は優しいし、自分のペースで実験などできますので、研究室の雰囲気がとても好きでした。もう一度日本に戻りたいなと思って、（博士課程で）日本に来ました。

日本に来て4年目ですが、今までたくさんの日本人に出会いました。正直に言うと、中国人に対して偏見を持っている人がたまにいます。でもちゃんと中国の文化を理解して、中国人の立場に

立って、客観的に中国のことを考えている人もたくさんいます。でも東大のある先生が「中国人のパフォーマンスが低いので、営利企業では採用しないだろう」と書いていました。これは偏見です。でも私のアルバイト先の店長さんは、その記事を見て恥ずかしくなったと言っていました。かれは中国人を理解してくれていて、丁寧にいろんなことを教えてくれて、とても優しい日本人だと思います。偏見や差別は人によると思います。

日本の生活はとても楽しいし、日本が大好きです。偏見とかは友達に聞いて少しあるかも知れませんが、私はほとんど経験していません。

シム：では卒業後は日本に残って就職したいですか。

ジャン：はい、私は日本に残りたいです。

シム：日本は人口が減ってきているので、特に高度人材はとてもほしがっていますから、いいですね。差別や偏見については、出会う日本人によっても違いますし、差別を受けたという人はその人の考え方にもよりますね。

堀さんにお聞きしたいです。4年間アメリカに住んでいらっしゃったので、アメリカでの経験や違い、日本の特徴などなどをお話しいただけますか。

<アメリカはどうか？>

堀： 東南アジアのなかでも国によって差別があったりしますね。文化の違いや表現の違いはハラスメント問題になりますね。相互理解ができていない、コミュニケーションができていないところに原因がありますね。

アメリカでは差別もよくあるのですが、アメリカと言う国は人種のるつぼなので、お互いのことを理解し合うのが上手というか、まずバックボーンを話すと言うことに気をつけていますね。日本では（過去には）日本人だけで生活してきているので、相手のバックボーンをそんなに知らなくても、共通言語、共通認識がありますので、グループで仕事でも成果を上げられたのですが、今はそんなことはないと感じています。

アメリカではアジア、東南アジアと言う一つのまとまりが合って、アジア人同士よく一緒に遊んだりしていました。アメリカ人はそのようなアジア人を脅威に思っているところがあったようです。アメリカで借りていた家のオーナーはシンガポール人で、アジア人にしか家を貸さない、白人には家を貸さないと。そういったことがよくありました。ハーバード大学でもアジア人枠を設けておかないとアジア人ばかりになってしまう。アジア人は優秀で勤勉なので、アメリカはアジア人を脅威に感じているようでした。現に、私はシアトルにすんでいましたが、市長はアジア系でしたし公立中学校の子供たちも4割がアジア系でした。アメリカもどんどん変わってきていますね。

相互理解が大切ですが、そのためには自分のバックボーンを見せることが一つの解決策ではないかと思います。

私の会社では外国人が入社した時、指導員というか、メンターをつけています。それは差別ということではなく、よりお互いの理解を深めてもらうという意味があります。プラスアルファとして日本人、日本文化などを知ってもらい、お互いの理解を深めるために必要かと思っています。

シム：差別をなくすと言うことは、相手を知ること、知ろうとすることですね。

先ほど、シンガポール人の大家さんがアジア人にしか貸さないと言う話が出ましたが、では日本人の大家さんが日本人にしか部屋を貸さないと言ったとき、それは差別になるか。それはその人のポリシー、好みなのか。好みと差別や偏見はどのように線引きするのか。区別と差別をどう区別す

るのか……。ところで、「多様性」という表現、私は日本の小中高でよく講演したりしますが、日本の教師たちは「みんな違ってみんないい」と言う言葉をよく言いますね。悪い人もいるんじゃないの？こんなきれいな事で片付けちゃっていいのかな？と思います。

先ほど差別について聞きましたが、イタリア出身の女性が、三軒茶家の駅の近くで「国へ帰れ！」と言われたそうですが、こんな経験は今までありましたか。皆さんはないですか。

チャン：私自身は一回もそんなことはありませんでした。

仲村：先輩から聞いた話ですが、アルバイト先で、お客さんが名札を見て「おまえ外人？おまえ要らない、日本人呼んでこい」と言われたそうです。

シム：よく聞きますね。日本語を確認しないで、「日本人呼んでこい」と。今レストランやコンビニで働いているのはほとんど日本人じゃないのにね。現実を受け入れられない日本人もいるということですね。ジャンさんはどうでしょうか。

ジャン：レストランと言え、今のレストランはメニューにはたくさんあっても写真があるので、言葉が通じなくても問題ないと思います。私はそんな経験はないのですが、最初は言葉が通じないと、日本人が何を言っているのかわかりませんので、相手の感じがわからなかったのだと思います。やはり言葉が通じないと、日本人はやはり日本人の肩を持つと思います。

<言語の壁>

シム：私は長年日本に住んでいますが、最初は言葉がわからなかったもので、差別の言葉を浴びせられても、意味がわからなかったですが、どんどんわかってくると、「あっ、私のことを見下しているな」と言うことがわかって来ました。外国人は日本への愛憎が交互していて、時間とともに日本への本当の愛が生まれてくるのだとおもいますね。

さて、言葉と言う話が出てきました。堀さん、阪和興業では言葉による差があるかどうか、日本語が難しいから偏見が生まれやすいのか、英語のほうが直球ですべてをいうから、いいコミュニケーションがとれると言うことはありませんか。

堀：日本は会議が多いのですが、みんなあまり話さないのです。外国籍の方が会議で何かしゃべっても、あまり聞いていないのです。ところが英語で会議をすると、日本人は話せないというわけでもないのですが、もっとしゃべらなくなる。逆に外国籍の人が堪能な英語でしゃべるとちょっと見方が違一生懸命話を聞いてくれると言う現象が起きるようです。つまり英語で話すと上下の関係がフラットになるので、うまく伝えられるときがよくありますから、たまには英語で会議をやるのも効果的ですね。



シム：英語に対してコンプレックスを感じる人がいるということですね。

逆に、外国人が日本語を話すとき、言葉のニュアンスがうまく伝えられなくて、ため口になったり、敬語が使えなくて、失礼になってしまう場合があります。私も悪気があって言っているのではな

い、どうしても言葉の文化、バックボーンに基づいて日本語でしゃべってしまうと、日本人の耳には失礼に聞こえたりすることがあります。それについてはどう思いますか。

チャン：私は日本語で話すと、友達になりやすいという感じがあります。英語だと日本人はシャイだ

し、コンプレックスをもっている人もいるので、下手でも日本語で話した方がいいと思いました。
最初の頃は日本語が下手でしたので、先輩に対しても失礼な言葉を言ったと思いますが、友達が助けを出してくれたこともありました。

シム：相手の立場がわかることも大切ですね。クスマーさんはどうですか

仲村：私は最初広島に行ったときは日本語がわからなかったもので、英語で話していましたが、みんな日本語で、私だけが英語だったので、話し相手になってくれるのは大人でしたね。同じ中学生とは楽しかったのですが、あまり交流できなかったのです。大人の人も英語に自信がなかったようなので、関係はフラットな感じでした。そのあと自分で日本語を勉強したのですが、独学だったので変な日本語を話していても外国人だからしょうがないと受け止めてくれていました。でもだんだん上達するにつれて、日本人の期待が大きくなってきて、敬語や難しい日本語が出来ないと、相手がちょっと気分を悪くしたこともあったり、失礼な印象を与えてしまいました。

シム：敬語は日本人でも使えない人が多いですね。

ジャン：私は最初の留学は英語のプログラムでした。先生は「日本語が出来なくても生活できますよ」と言っていましたが、研究室では日本人はあまり英語を話したがりません。研究については英語で話しても、普通の会話はあまり英語を使いたがりません。日本語が出来ないと日本人といい友達になりにくいと思いました。10ヶ月ぐらい経つと日本語がうまくなってきて、日本人と多く話せるようになり、日本の生活が楽しくなってきたような気がしました。日本語が出来たら、もっと日本の文化や社会が理解できると思います。

シム：下手でもいいから、日本語を話すべきですね。以心伝心は日本人でも最近は難しいと思いますが、まして、宗教文化言葉が違う外国人は、最低限の日本語が出来たほうがいいと思いますね。
堀さん、外国人がいる企業ですが、普段気を遣っていることは何でしょうか。

<グローバル化する社会>

堀：日本は外国人がいないとやっていけないという時代になってきています。また世界で戦わなければならないようになってきます。当社は東南アジアにも一つの阪和興業という会社を持っていて、拠点をシンガポールに移していますし、次にはおそらく中南米やアフリカに展開すると思います。世界で戦わないといけなくなってきています。もう一つは労働人口も減ってきていますので、外国籍の方の活躍は必然になってきていますので、当社もグローバルに対応していなければなりません。

先ほど話が出たSGSも投資家たちの投資対象となってきています。

シム：最初日本へ来たときなんて便利なんだろうと思いました。日本語だけで済みます。シンガポールだと地下鉄の放送も英語だけでなくほかの言語で言うのでとても長い。グローバル化というのは面倒くさいものです。ただ、多様な人材を活用することはシンガポールの宿命なのです。

最後に皆さんに聞きます。自分の国で自分の言語で生活する方が楽なのに、なぜあえて日本に残ることを選んだのですか。また日本の方へのメッセージがあれば教えてください。

チャン：私はベトナムだけではなく、いろんなことを知りたくて日本留学をしました。卒業してもっと新しいことを知りたいと思い日本に残りました。日本にいた間は、日本人だけでなくいろんな国から来た人とも会えます。自分と違う人と接するときには相手のことを理解しないといけないので、面倒なこともあります。それよりもいいことの方が多いので、日本に残る方を選びました。

仲村：私も同じように、ほかの世界を知りたいと思って日本に来て、日本に住んだら食べ物もおいしいし、日本人は優しいので、日本に住んでいます。3年目にいやなことがあったとき、タイであろうが日本であろうが、いいところも悪いところもあるとわかりました。海外に出たからこそ、それがわかったのです。何かあったとき、日本人だ、なに人だ、じゃなくて、その人個人だと見られるようにしたいとおもいました。このような考えで行けば人生が面白くなると思います。将来はまた別の国にいるかもしれません。グローバルは楽しいと思います。

シム：なるほど。「他を知り己を知る」という言葉がありますが、相手を知ることによって、逆に日本を振り返るというチャンスになりますね。

ジャン：ずっと同じところにいるのはつまらない。いろいろ新しいことをやってみたいと思います。面倒だとは思いません。いろいろな言語が話せたら楽しいと思います。人生は短いので、いろいろな国に行って、いろんなことをやって、自分の視野を広げることがいいと思います。例えば、今は一つの国でいろんな料理が食べられますが、やはり現地で現地の料理を食べることはまた違った楽しみがあると思います。

<若い人へのメッセージ>

シム：最後に堀さん、ここにいる日本人代表としてメッセージをお願いします。

堀：今は国境がありますが、これは人間社会だけの話で、鳥などは自由に飛んでいますね。世界はボーダレスになってきています。若い人に、日本一を目指すのではなく世界一になることを考えてほしいですね。私は日本が好きなので日本で頑張って生きていきますが、世界がグローバル化すると、国籍は関係なく個人の力をつけないといけなくなってきています。

世界にはいろんな人がいて、その中で世界一になるのは本当に難しいですね。でも目指してほしい。私自身はエビの取扱高で世界一になったのですが、それを達成すると、世の中の見えてくるものが違ってきます。若い皆さんにはどんどん外に出て、世界一を目指して欲しい、そして日本のGDPをあげて欲しいですね。(笑)

シム：ありがとうございました。「Boys and Girls, Be Ambitious!」

「Ladies and Gentlemen!」年齢に関係なく「Be ambitious!」

私たち外国人は日本が大好きで来ているのです。それなのに日本が嫌いになって帰国するととても残念だし、日本にとっても非常にもったいないと思いますね。めんどくさいことは多少はありますが、面倒くさいからこそ楽しさもあるのです。何も苦勞せずに楽しさはありません。今日は楽しいという言葉がたくさん出てきましたが、人生は楽しんだもの勝ちです。ありがとうございました。



グループディスカッションで何が話されたか。ファシリテーターからの報告

グループディスカッションの全参加者は126名。内訳はアジ風会員66名（内、外国籍17名）、世田谷区内の中学、高校（鷗友学園）生、大学（昭和女子大）生と非会員で60名だった。それを年齢、性別、国籍など、多様性を重視して13のグループに配分した。ファシリテーターにはアジ風のベテラン会員をお願いし、事後、どのような話し合いがあったか、レポートを出してもらった。

ほとんどのファシリテーターが言及しているのは、「若い人たちに刺激を受けた」ということである。アジ風は、今後もこのような多様なメンバーの異文化コミュニケーションがもたらす「気づきと自己啓発」に力を注いでいきたいと願っている。



第一班 ファシリテーター 伊藤 莞爾

日本人会員 3名、留学生（中国）1名、鷗友生3名、昭和女子大生1名

冒頭に、テーマを「多文化共生」とした。これは日本で差別や偏見がないということではなく、留学生や日本で就職・結婚された方は比較的恵まれた環境にあり、差別を受けることが少なかったことに起因すると思われる。

中学生からは、「学校でも多文化共生や差別・偏見などについてもっと教えるべきではないか？」という意見が出された。この世代ではまだ実感として差別や偏見ということが湧かないのだと思われる。また、企業が多様性を重んじるのであれば、あえて外国人社員に対し「日本文化」を研修する必要はないのではないか、という意見もあった。

大学生や留学生となると、伝聞情報も含め、習慣の違いからごみの分別収集などが理解されていないまま、周辺とトラブルが起きるなどを体験しており、相互理解の重要性を感じていると思われる。更に今の中高生は外国人が身近に居ることが常態であり、多文化共生は当たり前のこと、という世の中がすぐそこに来ているのでは、との意見も出された。

発表者の奥村さんは、ディスカッションでは話されなかったが、『共生』の対義語は『抗生』であり、腸内フローラを例に『共生』の意義を話されたのは、他のグループの方々にも理解を深めてもらえたのではないか、と考える。

第2班 ファシリテーター 伊藤春雄

日本人会員2名、留学生（タイ）1名、鷗友生3名、昭和女子大生1名、非会員1名

「多文化共生」をテーマにディスカッションを行った。各自発言内容は以下のとおり。
50年以上前高校生の時、交換留学でアメリカのワシントン州に留学し、白人の自宅にホームステイした。日本人を蔑視するような態度はまったく無く、大変親切にして頂いた（アジア女性会員）。去年アメリカに1か月留学した。他人の話や噂で他国を判断すると誤る。国を意識しないで個人と交流する意識を持った方が上手く行く（高一）。仕事で香港に駐在したことがある。アジアの人々は欧米人と違って身体や考え方、文化に共通点がありホットする。固定観念を取り払って接することが大事である（アジア会員）。同級生は世界に目を向けない人が多いが、自分で海外を訪れ、文化の違いを判断することが大事である（大学3年・中一）。タイの文化と日本の文化は似ている。日本のアニメから日本に興味を持った。日本人は親切なので日本が好きである（タイ留学生）。

結論として、多文化共生を理解し実践するには、自分で現地を訪れ、現地の人々と直接接交流することが必要である。また欧米諸国とアジア諸国を“区別”しても“差別”しない精神が重要であるとの指摘が新鮮であった。

第3班 ファシリテーター 上 篤

日本人会員3名、留学生（タイ）1名、鷗友生3名、非会員2名

「日本社会におけるグローバル化と多様性」の阻害要因として、外国人に対する差別・偏見があるが、我々は「〇〇人」などと、ステレオタイプ的にとらえる傾向がある。

しかし、異文化コミュニケーションを続けていくと、〇〇人の中にもいろいろな人がおり、ひとくくりにすることはできないことがわかり、差別・偏見をなくすためには、一人一人の個人としての違いを認識することが基本であると気づく。そこで初めて相互理解ができる。

そのためには、お互いの文化的バックグラウンドやバックボーンを知ることが大切である。好奇心をもって相手を知ろうとし、自分自身についても、自己認識を深めていけば、「ひとり一人違う」という実体験を通して、相互理解のスタートラインにつける。

若い中高生が「アサーション（的を得た自己主張）」の大切さを語り、グループワークの中でも実践している姿や、自分の意見を堂々と述べ、他の人の話を聞く姿勢に接して、グローバル化と多様性に明るい未来を見た。

第4班 ファシリテーター 上 高子

日本人会員3名、元Iメイト学生（ベトナム）2名、鷗友生3名、非会員1名

各人の自己紹介で浮かび上がったのは、個人的異文化体験で自己啓発が実現できたという認識だった。アジ風会員はIメイト会員交流あるいは派遣教師として学生たちと触れあった体験、また鷗友生、非会員とも、外国に住んだ体験があった。

中でも、鷗友生のひとりが、中東のインターナショナルスクールでした体験は、偏見や差別は情報の偏りによって生じるということのよい見本である。彼女が帰国子女として日本の公立小学校へもどったとき、イスラムへの激しいバッシングがマスメディアで盛んに取り上げられていたせいか、いじめのような扱いを受けたが、欧米からの帰国子女は歓迎された。バーレーンでは様々な国籍の児童がいて、それぞれが様々な視点からものごとをとらえるという、多文化共生の実体験ができたが、日本の児童は単一の文化圏にある、と言える。

日本人がアジアを蔑視し、欧米を崇拜するのも、明治維新以来の教育やメディアの情報の偏りにあるともいえる。この偏見が行為となると、差別につながる。「日本は、働き方改革においても欧米のグローバルスタンダードだけを見本にするのではなく、日本人に合った独自のものにしていけるべき」と発言する、世界を見据える若人たちに未来を託したい。

第5班 ファシリテーター 奥山 正昭

日本人会員3名、ベトナム人（社会人）1名、中高生3名、大学生 1名、非会員1名

幅広い年齢層と異なる国籍のメンバーで、活発な意見交換となった。

年配層からは、自身の差別・区別の経験談。数十年前の米国出張時に蔑視・差別対応された苦い実体験、国内でも一部残る差別現状、アジアからの訪日客の一部のまずいマナー、海外へ行って異文化に触れたからこそグローバルな視野を持てたとの意見が多く出る。

若年層からは、国とか宗教で人を区別するのではなく人そのものを見ることが大切。アジアの他国を見下している日本人がいるが今やその国力差はないとの認識。多様性が少ない日本で育ったので外界が見えなかったが、今日のパネルディスカッションを聞いて海外で見聞を広めたいとの願望が湧いてきた。ただ、若者の一人は、日本は息苦しいので、日本人が少なく自然環境に恵まれた米国の某州に移住希望。

元Iメイト学生からは、母国・ベトナムでは本音でのつきあいが通常なので衝突もあるが相手のことが分かりやすい。本音と建前があるに日本人に戸惑っている。

参加者のほぼ全員で共有できたのは、異文化に関心を持ち、相手への理解を深めるべきとの意識であった。特に中高生からの意見が新鮮で、頼もしく思えた。今回の新春交流会は、彼らにとっても刺激的な体験になったようだ。まさに、アジ風が目指す多文化共生への賛同者が増えたように感じられ、うれしい。

第6班 ファシリテーター 奥山 寿子

日本人会員2名、法人会員1名、学生会員（ベトナム）1名、大学生1名、中高生3名、非会員1名

差別や偏見はどこで起きているのか。中東の人たちが固まって作業している現場があり、「すこし怖い」と感想を漏らす住人もいる。またベトナム人からは、個々の国の文化が違うのに、東南アジアの国々とひとくくりにされている気がすると言うベトナム人の発言。メディアの報道も外国人のイメージを固定していると思うという意見もあった。

外見など異質なものに対する拒否感があるのかもしれない。また習慣の違い（例えば大声で話す中国人、列に並ばない外国人）による違和感、抵抗感がある。メディアの報道などで外国人に対する固定観念ができていてのではないか。さらに、日本人の英語コンプレックスがあり、英語話者に対するのと、アジアの言語で話す人への対応が違う、という意見がでた。

偏見や差別をなくすには、違いを知ること、相手の背景を知ることが大切。お互いを理解しようとする気持ちが必要である。言葉のバリアーがなくなれば外国人に対する不安が減少するだろう、その意味でも、「やさしい日本語」への取り組みが必要だと言う意見がでた。多様性を認めるには時間がかかる。不斷の努力で人間性を高めて行けば社会の民度があがる。歴史の事実を知り両国の関係を学ぶことで理解が深まるとなど、多くの事例とともに、有意義な話し合いが持てた。

第7班 ファシリテーター 大橋 典子

日本人会員3名、日本企業勤務（中国）1名、鷗友生3名、昭和女子1名

パネルディスカッションの感想では、鷗友生海外留学などの経験も交えながら、「受け入れる、自分の考え方を変える」と、前向きな発言が多く、大学生は、「勉強の場では留学生とも普通に会話するが、進んで自分のプライベートに受け入れてはいない」と自己分析。大人は「日常生活で交流するには、対日本人と全く変わらない」としながらも、いざ親族が結婚するなど、深いかかわりになると自信がなく、見えない壁があるという意見が出た。

両親が多様な外国人と交流している中学生は、欧米でアジア人が蔑視されていることを指摘した。それに対し日本においても同様で、特に欧米への憧れが強かった年長の日本人は、過去の圧倒的経済格差の印象が拭えていないのでは、と発言があった。中国籍の社会人は、母国でも欧米人をアジア人より上にみる傾向は明白であるとし、このことはアジア人全てにとって課題であると考えられる。

今回は、恵まれた環境の外国籍の人が多く差別的経験を聞くことができなかったが、労働者として来日している外国人はどうだろう、等、社会的視野をもった中学生の発言も聞かれた。総じて若い年代は多文化共生社会の課題をつかみとる力があり、年長者より外国人を受け入れる壁は低いと感じられたディスカッションだった。

第8班 ファシリテーター 斎藤 利治

日本人会員2名、留学生（中国）1名、鷗友生4名、昭和女子大生 1名、非会員 1名

主な意見

- ・ 偏見と差別は「無知」と「無関心」から生まれることが多い。常にアンテナを高く張り情報の収集に努めることが重要である。
- ・ 外国人に対するイメージは、様々なメディアからの情報に左右されることが多く、ステレオタイプ化することがあるので、注意が必要である。
- ・ 同じ外国人といっても、欧米人とアジア人では印象が異なることも多い。
- ・ 子供が抱く外国人に関する情報の多くは、大人から発信されるものであるから、大人に対する教育も重要である。
- ・ 外国人に対する接し方は、子供や若い世代の人たちの方が高齢者よりも積極的で上手いのではないか。

若い時に世界を体験することが、これからの時代にはとても重要である。

- ・ 多文化共生社会を実現させるためには、お互いが少しずつ我慢し合い、寛容な態度で接することが重要である。

感想

- ・ パネルディスカッションに参加した現役留学生や留学生OGは、「日本で生活する外国人」の中でも恵まれた環境にあるため、今回のテーマである「差別と偏見」を自らの体験から語ることは難しかったのではないか。
- ・ グループディスカッションでは、グローバル化に対する若い中高校生や大学生の感性の鋭さに驚くとともに、今後の彼らに対する期待が膨らんだ。

第9班 ファシリテーター 島村 美智

日本人会員3名、留学生1名（中国）、鷗友生2名、昭和女子大生1名、非会員1名

討議は、パネルディスカッションへの各自の感想から入った。日本人はなぜ、外国人をオープンに受け入れようとしないのか。これに対しては、相手を受け入れ、自分を開示するには勇気が要る。外見からのステレオタイプの判断で決めてしまい、相手のバックグラウンドを知ろうとしない。日本人は外国人をお客さん扱いにして、溶け込もうとする相手に協力しない。などの意見が出た。さらに、多様性とは何かとの話合いになり、国籍に関わらず、すべての人には個性、違いがあり、その区別を差別とすると偏見が生まれ、自分とは違う個性と捉えていけば柔軟な対応ができるのではないか。これからの時代、多様性は、いいか悪いかの問題ではなく、必然的に社会に存在してくるものであり、新しいものに対し、客観的に観察し、常に好奇心をもって対応することが、なにより大切なことと思われる。若者への教育も大事な要素であり、無関心から、興味へ、さらにはより積極的に、新しい出会いに向かえる若者が増えることで、日本は真に開かれた多様性に対応できる未来を進ることができる、結論付けた。

第10班 ファシリテーター 中村 泰寿

日本人会員3名、留学生2名（タイ、インドネシア）、鷗友生3名、昭和女子大生1名

パネリストのひとりが、弓道部で日本人の輪に入れなかった体験について、自分が壁を立てて構えていたのだろう。受け入れられるためには、自分が入っていくことが大切ではないか。インドネシアの留学生も部活で同様の体験をした。日本人の方が外国人に対して戸惑いがあるのではと思う。

鷗友学園の学生の経験では、米国滞在時、ナショナルデーで浴衣を着て太巻きを持って行ったことがあり、言葉は通じなかったが、輪には入れた記憶がある。アジアに転勤していった友達は、その学校の朝礼で話し、自分から入って行くと、周りも自然に受け入れてくれ楽しんでいる。低学年の経験だが語学コンプレックスは不要、先ずは自分から入り込むことが重要。

タイの病院で通訳のインターンシップ時、「もっと偉い人を連れて来い」と言われたそうである。時代によって変わってきたと思うが、アジアの中では、日本人が上から目線で言う時期もあったと思う。

大人になり人間の価値観が出来てから外国人と接するのは、構えてしまうので難しい。

7年前の日本人との接点は英語であったが、あまり通じなかった。最近は日本人が英語を喋るようになってきた気がする。

ファシリテーターとして、若い人が伸び伸びと自分の意見を言うのに驚いたこと、日本の若い人は素晴らしい、という感想を持った。

第11班 ファシリテーター 古畑 仁一

日本人会員3名、留学生（中国）2名、鷗友生3名、昭和女子大留学生（モンゴル）1名、

自己紹介のあと、午前中の「日本人の意識調査」結果とパネル・ディスカッションをふまえて、外国人に偏見を抱くのはなぜか、多文化共生を実現するために何をすべきか、などを話し合いました。

鷗友学園の生徒さんも積極的に発言し意見を述べてくれました。

主な意見を紹介しますと、

- ・ 偏見の原因は子供の時から外国人と触れ合う機会がないため。外国人と接する機会が多くなれば解消するだろう。
- ・ 異質なものに対しては無自覚だと他者の意見に左右される。幅広い情報と知識を獲得して、一方に偏らない自分の考えをもつことが大切。（無知の知）。
- ・ 国籍や人種をステレオタイプで判断せず、お互いの理解が進めば偏見はなくなると思う。
- ・ 日本の学生は好奇心が薄く、行動パターンも型に嵌っている。「違い」に対しては敏感で拒否する人がいる。
- ・ 留学生の友人が病院に行ったときの医者への対応に偏見を感じた。
- ・ 留学生には世話になってもお礼を言わない人もいるが、これも文化の違いからか。
- ・ 日本は清潔で交通の便も良いので、ずっと住みたいと思う。

第12班 ファシリテーター 古海 正子

日本人会員2名、タイ1名、留学生（中国）1名、鷗友生4名、昭和女子大生1名、

大学院で研究中の留学生から、日本文化に大変興味を持って日本への留学を決めた、との話をきっかけに、留学先国の希望などを中学生たちに聞いた。4名からはそれぞれの希望国が、カナダ、ニュージーランド、フランス、チェコで、アジア諸国への関心が余り高くない事がわかった。昭和女子大の学生は留学よりも就職に関心があるとの事。

今回のパネルのテーマに関しては、学生たちからは、誰の心にもある差別意識を直したい、心の中に住み着いている無意識の決めつけを改めたい、誰もが見た目で決めがちだが、特に黒人に対しては差別意識をなくしたい、「外国人だから」という気持ちを改め、互いに知り合う事が大切だ、などの意見があった。若い人たちが今回のパネルディスカッションで触発され、日本を見つめ直し、留学生の考えや行動力を肌で感じたようで、彼女たちのこれからの成長に大変大きな示唆を与えたと確信した。グローバル人材が育ちにくいと言われている日本で、今回のような機会は若い学生たちに大きな刺激となると感じる。若い時から外国人の視点や国際的視点で日本を意識することは大切なことで、アジ風が、世田谷区でモデルケースとなり、日本人とアジアからの留学生の架け橋になれるだろうと期待が膨らむ。

第13班 ファシリテーター 松野 芳夫

日本人会員2名、留学生（中国）2名、鷗友生4名、昭和女子大生1名、

「多文化共生」への気づきと自己啓発について活発な意見交換を行った。大括りにすると、多文化共生は、過渡期にあるものの必ず実現すると思う。多文化は、融合し合い、繋がり合い、分かち合っていると結論した。例えば中国では、50を超える民族人種の集まりであるが、文化は南北で異なり隣村間でも違うが、時間をかけて融合して来た。また楽器演奏で、日本のビッグバンドに入り演奏した。奏者を見ると多国籍の集まりである。それぞれが、音を出し演奏する。お互いが、解り合い音が揃う。憧れが、幸せな気分になり心地よい。今日の様な環境で外国の人達と多文化共生を、話し合う機会は無く、今回幸いにも学びの場、知る機会を得た。とても素直に自分の意見を述べる事ができた。興味を持ち共感し合えればと思う。一方、偏見、差別は、直ぐには解決しないと思う。だが、少しずつ改善して行く。何故なら皆が、地球人であり多文化共生は、当たり前になるはずだから。

編集後記

「外国人に対する偏見と差別の解消に向けて」という世田谷区助成事業に助成金を申請し、認可が下りたのは昨年7月のことでした。それから半年、日本に住んだことのある、Iメイト学生(OBOGを含む)にアンケートを実施し、それを基にパネルディスカッションの打ち合わせを始め、世田谷区住民の参加者募集を手配しました。

困ったことに、アンケートでは「偏見・差別」というほど、明白なデータがあまり集まらなかったこと、パネルディスカッションでも、日本人の聴衆に耳が痛い話はパネリストに遠慮があったのか、あまり「偏見と差別」が明確にならず、モデレーターのシム先生とともに運営に苦心しました。また当日はWHOによって、新型コロナウイルスがパンデミックと報道された直後で、鷗友学園の先生方、ご父兄の懸念は大きかったことでしょう。

このような状況でしたが、このプロジェクトが成功であった、と確信できたのは、グループディスカッションのファシリテーターからの報告を読んだ時でした。多様な構成員で「多文化共生」について話し合い、若い中高大生のリベラルな考え方に接して、熟年の会員に「気づきや自己啓発」があったと受け取れたからです。一方、若い人たちにも刺激となったようです。当日は一人のキャンセルも遅刻もなく、熱気の中でよい交流会となりました。

心からお礼を申し上げます。

(当プロジェクト企画担当理事 上 高子)

新春交流会は掲題のテーマで企画すると決めてから半年、上高子理事を中心に世田谷区在住の会員の皆さんの協力を得て、2月1日の実施に漕ぎ着けました。

東北震災直後には考えもしなかった外国人の増加は、私たち日本人に様々な課題を与えています。今回の交流会は予想を上回る参加者数で、外国人との共生がまさに今の日本の大きなテーマであることに気づかされました。今回参加してくれた鷗友学園の中高生、昭和女子大の大学生たちが、中高年の会員に交じって、積極的に発言してくれたことは何よりもうれしいことでした。

アンケートについては、実施対象がかなり優秀で経済的にも恵まれているアジア風のIメイト学生やOBOGたちでしたので、日本の現実を正しく反映されていない恐れもありますが、十数年前に比べると日本人のグローバル化への意識はかなり向上してきていると感じました。

パネルディスカッションでは、シム先生のユーモアあふれる司会に導かれたパネリストたちの気づきやメッセージは、それぞれの経験に基づいたものであるだけに、多くの参加者の共感を得たと思われます。

今、持続可能な開発目標(SDGs)について、教育現場やメディアで盛んにとりあげられていますが、その17の目標のひとつが「人や国の不平等をなくそう」であり、今回の交流会がそのヒントとなれば幸いです。

(広報担当理事 奥山 寿子)